

---

# 黒き旅人はのんびりと世界を渡らされる

零条シズク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒き旅人はのんびりと世界を渡らされる

### 【Nコード】

N8933S

### 【作者名】

零条シズク

### 【あらすじ】

主人公朝比奈夜々（あさひな やや）が明るくやさしいクラスメイトと共に異世界に飛ばされる、そんな物語です。主に主人公視点ですが、たまにいろんな人に視点は変わっていきます。はてさて主人公は元の世界に帰れるのか？そもそも帰る気はあるのか？いろいろ見ものだと思ってください。初めての投稿作品（処女作っていうんでしたっけ？）ですが、どうか見守っていてください、アドバイスあったらよろしく願います。

## ブログ前 現実逃避したっていいじゃないか（前書き）

はじめまして零条です、読者の皆さんは忙しい人も暇な人もいるかもしれませんが、見てくださってありがとうございます、では「黒旅」スタートです！

## ブローグ前 現実逃避したっていいじゃないか

どうしてこんなことになったんだろう？

なんで俺たちは異世界に飛ばされているんだろうか？

そんでもって何で俺だけ城を追い出されたのだろうか？

あいつは、まあ何とかなるだろう。

それにしてもこれからどうしようか。

とりあえずここまでの経緯を回想しようか。

あれは学校から帰っている途中のことだ。

俺はいつも通り学校を出て下校中、俺の通っていた学校は制服指定がなく校章さえつけていれば何でもいいといういい加減な学校、校長曰く、「みんながおんなじ服とかつまないじゃないか！」とのこと、何を考えているのやら。

まあ話を戻して、そんなわけで俺の服装は黒のズボンに青のシャツ、白のベストに赤いコートといういい加減な格好、周りから色があつてないといわれるが、暖かさを選んでいるだけなので問題はない。

「よお、今帰りか？」

そんなことを考えていると後ろから声をかけられた。

「やあ、薫も？」

かみしろがある

こいつの名前は神城薫、いわゆる爽やかな男だ。

しかしそれは表向きでの姿であり、裏では汚いことをしまくっている最低の野郎だ・・・ごめん嘘

今だって整った顔立ちを最大限に使った笑顔で俺に笑いかけているがこれだってやつにとっては当たり前のことだ。

今だってその笑顔を見て鼻血を出したり倒れたりしている女子がい

る、古典的過ぎじゃね？

まあいいや、とりあえず俺たちはいつも一緒に帰っている家が近いとかそういうのではないが途中までは一緒に帰っている。

今日もいつも通りくだらない話をして別れて帰る、そのはずだった。俺たちの足元になんかでつかい穴が出現するまでは・・・。

というわけで、

「・・・はっ！？」

落下開始。

「はあああああああああ！？」

いやゝ人って混乱するとまともな思考ができなくなるって言うけど本当だね、叫ぶことしかできなかったぜ！

## プロローグ前 現実逃避したっていいじゃないか（後書き）

次の話では異世界で二人を召喚した人の話です

## プロローグ後 召喚します（前書き）

プロローグ後編です。まだ本編ではありませんよ。

## プロローグ後 召喚します

SIDE      ????

「今日この日この瞬間を持って魔王を倒すため、勇者様の召喚の儀式を開始する！」

シン、とした空気の中に私の声が響く。

今日は魔王を倒してもらったための勇者を召喚する大事な日だ。

私は召喚のための魔法陣を起動するために魔力を通す。

それと同時に魔方阵から光が発せられる。

最後に私の血をこの魔方阵に垂らせばいい。

私は事前に持っていたナイフで腕を軽く切る。

一瞬の鋭い痛みと共に軽い脱力感が自分を襲う。

ナイフで自分のみを切るなど初めてのことから当然といえば当然だろう。

腕から滴る血を魔方阵に静かに垂らす。

・・・ポタッ



魔方阵が発光する、それと同時に膨大な魔力が魔方阵から湧き出てくる。

魔方阵から出てくる魔力の量によって勇者の力は決まるといわれている。

これだけの魔力ださぞ強い勇者が出てきてくれるだろう、と私は期待に胸を躍らせていた。

しかし、何事にも例外というものはあるものだとは思った。

もしかしたら失敗するかもしれない、そんな不安感が私を襲ってくる。

しかしそんな私の不安も杞憂に消えた、魔方阵が爆発したのです。

・・・私？避難しましたよ？じゃないと爆発に巻き込まれてしまうしまがい間違つて異世界にいきたくはないですからね。

しかし私はこのとき思いもしませんでした。

まさか、

魔方阵から出てきた人が二人もいたなんて。

## プロローグ後 召喚します（後書き）

次の話では主人公が異世界に到着します果てさてどうなることやら・  
・（笑）

召喚された・・・

SIDE 俺

「うおおおおおお・・・！！！！」

・・・今俺たちがないしてるかつて？

簡単だよ・・・。

今俺たち、全力で落下してます！

何でこうなったかってそりゃあ・・・（プロローグ前を見てください）だからだよ！

それにしても風がやばい、何がやばいってすげえ痛い。

スカイダイビングが気持ちいいって行つてたやつがいたんだけど俺の感想はすごく痛い。

第一なんだってこんなことになったんだか・・・。

しかも隣のやつ（薫）見ろよ、すげえ笑顔で落下してくぜ？

怖くねえのかな？

俺？ものすごく怖いね！

どこにつながってるか以前にこのまま落ちたら百パー死ぬるって思ってるからね！

・・・なんで俺こんなにハイテンションなんだろう？

俺もつともの静かだったはずなのになあ・・・。

おっ？そんなこと考えてる間に光が見えてきたな！

天国にいる母さん父さん（生きてるけど・・・）

俺は今よりそちらに行きます！（生きてるけど！）

そんな馬鹿なことを考えていると「ヤッホーこれってアレじゃね？

召喚ものの勇者な展開じゃね？」バカがうるさいことを言っていた・

・・・じゃなくて体が光に包まれた。

S I D E        ? ? ?

どういうことでしょうか？

召喚の儀式には成功したようですが、その召喚陣の中から見えるのは二人分の人影です。

しばらくすると召喚時の煙が晴れて見えてきたのは金髪蒼眼の美形の男性と黒髪で眼は瞑っているため色はわかりませんがそこそこ整っている顔立ちの男性が出てきました。

召喚の儀式で二人の人間が召喚されたのは初めてです。

この場合どちらが勇者なのでしょう？

どうやら、黒髪の男性のほうが先に立ち上がりました。

なにやら周りを見渡しています、状況を把握しているのでしょうか？  
なにやらもう一人のほうに何かささやいています。

しゃべり終えるとあきれたようにため息をつきゆっくりと立ち上がりました。

と思ったら急に懷から細長い何かを取り出して眼の辺りにまきつけ始めました。

何を考えているのでしょうか？

次にこちらのほうに体を向けてこちらに向かってきます。

召喚した【巫女】として出迎えなければなりません。

私はお二人が離れてしまう前にそちらに向かいました。

そしてすでに起き上がっている黒髪の男性と起き上がり始めている金髪の男性に近きます。

すると近づいてきていた黒髪の男性よりも先に金髪の男性がこちらに来ました。

「ようこそいらっしやいました【勇者】様。」

私がドレスを持ち上げながら挨拶をすると金髪の男性はなぜか喜び、黒髪の男性もなぜか顔を悪くしておりました、何故でしょう？

とりあえず私は挨拶をすることにしました。

「私はステア・ミーティアといいます。」

「はじめまして、俺は神城薫だ。（ニコツ）」

・・・・・・・・・・・・・・・・ハッ！どうしたんでしょうか

私は。

ただ挨拶されただけです、それなのになんだか胸が熱くなっていました。

これが恋というものでしょうか？

そうやって放心していると神城様の後ろ男性が「・・・朝比奈夜々だ。」と名乗りました。

こちらの男性からは何も感じませんね、それどころかなにかあきれている表情をしていてなんだかむかつとしてしまいます。

それ以降もなにやらぶつぶつとつぶやいていますがよく聞こえませんが。

そんなことより神城様が何かい言いたそうです。

そちらを聞くことにしましょう。

召喚された・・・（後書き）

零条（以降「れ」）：「なんか微妙なところで終わりました。（泣）」

夜々（以降「や」）：「ならもつとちゃんと書けよ。」

れ：「・・・何故お前がここにいる？」

や：「いや、なんか暇だったから。」

れ：「だからって入ってきちゃだめでしょ？」

や：「いいじゃないか、俺たちの仲だし？」

れ：「俺たちの仲って矢田！ナンパ！」

や：「ちげえよ！って言うかお前女なの？！」

れ：「禁則事項です（ニコツ）」

や：「うわ！すごい笑顔だよこいつ。」

れ：「まあ私の性別のことはおいといて」

や：「もう流すのか・・・。」

れ：「次回はやーちゃんがかなりります。」

や：「なんかって何？！っていうかやーちゃんって俺のことか？！」

れ：「当たり前じゃないかやーちゃん、といっても今回しか呼ばないかもしれないけど・・・。」

や：「ぜひそうしてくれ・・・。」

れ：「まあ予告はあくまで私の予想で言っているのなので実際そうなるとは限りません！」

や：「お前作者だろ！ちゃんとした事実に基づいて予告しろよ！」

れ：「だってそうするとその範囲でしかかけないじゃないか。」

や：「そうかもしれないけどよお。」

れ：「そろそろ疲れたからそろそろ終わるね。」

や：「（だべっただけなきがするけど・・・。）・・・そうだな。」

れ：「ふんっ！（ドカツ！）」

や：「いつてえ何で殴った!？」

れ：「国語辞典。」

や：「さりげなく痛いよ！そうじゃなくて俺が聞いているのは理由だよ！」

れ：「たべってただけとかおもってたでしょ？」

や：「なんでわかったんだ？！」

れ：「それではまだ次回。」

や：「ちよっ！答えろよ！」

れ：「バイバイ！」

れ：「無視するな—————っ！……！！……！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8933s/>

---

黒き旅人はのんびりと世界を渡らされる

2011年10月8日23時26分発行